

優秀賞

『月まで三キロ』

伊与原新 著、新潮社、2021.

田中 穂乃花（国際学部 国際文化学科 2年）

私がおすすめる本は、伊与原新による短編集『月まで三キロ』である。一見して不思議に思うタイトルだが、この本を読み終えたとき、読者はその意味に納得し、夜空を見上げずにはいられなくなるだろう。

表題作「月まで三キロ」は、自死の場所を探す主人公の男とタクシー運転手の物語だ。男の苦しい境遇に胸を痛めながら読み進めると、運転手が「この先に『月まで一番近い場所』があるんです」と告げ、そこまでタクシーで連れていってくれることになる。そして物語の終盤、「月まで三キロ」という言葉の真意が明らかになる。この結末には衝撃を感じつつも心が温まるだろう。

著者の伊与原新は惑星物理学を専門とする科学者であるが、この小説に専門的な堅苦しさは全く感じられない。文章は驚くほど読みやすく、まるで物語がするすると心に染み込んでいくようである。それは、著者が単に理系の知識を披露するのではなく、理系の視点や考え方を巧みに物語に組み込んでいるからである。日常とは異なる視点で物事を捉えられる作品に触れると、新しい考え方や価値観に気付かされ、ハッとさせられる瞬間がある。

『月まで三キロ』は短編集であり、他にも六篇の物語が収録されている。例えば、受験に悩む少年がアンモナイトを掘る話や、家庭に疲れた主婦が山岳カメラマンを目指す話など、それぞれに異なるテーマが描かれている。しかし、全ての作品に共通するのは、科学が物語の重要な鍵として巧みに織り込まれている点である。月、雪の結晶、素粒子、富士山など、多彩な科学的要素が自然な形で物語の中に溶け込んでおり、読者は物語を楽しむうちに新しい知識にも触れられる。

この本は、太古の月に関する話や雪の結晶の種類、さらには素粒子やハイエイタスについても、難解な説明ではなく物語を通して自然と説明してくれる。特に文系の人々には、理系分野の知識を身近に感じられる良い機会となるだろう。また、科学を土台にして展開される人間ドラマは心温まるものばかりであり、時に涙を誘う感動がある。

本作は、科学の面白さと人間ドラマの感動が見事に融合した作品である。新しい視点を得たい人、科学を楽しく学びたい人、そして心に残る物語を求める全ての人にぜひ読んでほしい一冊だ。『月まで三キロ』は、読後に月を見上げながら深い余韻を味わう体験を与えてくれるだろう。